

日本に在住している「国際カップル」の言語使用と言語意識

一言語ポートレートとメタ語用的談話に着目して

フロリアン・グロッサー（ウィーン大学）

1. はじめに

近年では、外国から日本に滞在する人々の増加に伴い、いわゆる「国際カップル」が増えつつあるといえる。¹「国際カップル」は多言語背景を持つ人により構成されることが多いため、相互行為において言語にかかわる交渉が頻繁に行われる(河原 & 岡戸, 2009)。つまり、言語をどのような場面でいかに使用するかという交渉である。

夫婦間における言語とアイデンティティの関係についての研究は従来から行われており、アイデンティティは談話（対話の中での相互作用、および社会のレベルのディスコース）を通して形成されると指摘される(Piller, 2002)。ゆえにアイデンティティ研究において談話分析は重要な研究手法である。しかしながら、談話の中でカップルが具体的にいかに言語を使用するか、また談話において言語意識や言語イデオロギーがいかに表面化するかはまだ十分に解明されていない。特にドイツ語を母語とするオーストリア人と日本語を母語とする日本人の「国際カップル」の研究が未だにされていない。

そこで、本研究はオーストリア人と日本人の「国際カップル」が作成した言語ポートレートに基づき、相互行為に行けるメタ語用的談話とアイデンティティの関係を明らかにしようとする。

2. 理論的枠組み

人間はことばを使用することに伴い、コミュニケーションを成し遂げるためそのことばづかいに対しての言語意識を援用する。Silverstein (1993) は言語使用を解釈するための枠組みとしての役割を担う言語意識を「メタ語用論」と名付けた。相互行為における言語使用について発言することは「メタ語用的談話」である。メタ語用的談話とは、話者が自身の言語、ことば、言語能力（コンピテンス）について言及し、社会的空間の中で自己を位置付ける (positioning) という概念である (Spitzmüller et al., 2021; Wortham & Reyes, 2021)。自己位置付けというやりとりにおいて、話者がことばについての発言を繰り返し、その繰り返しにより、自己のアイデンティティとカップルとしてのアイデンティティが形成される (Bucholtz & Hall, 2004; Damari, 2010)。

コミュニケーションをするため、人がことば、(複数の) 言語やレジスターなどを使用するが、それぞれの要素を「言語資源」(linguistic resources) と呼ぶ。言語資源の全体で人の言語レパートリー (linguistic repertoire) が構成される (Gumperz, 1964)。

3. 方法

本研究は日常会話の録音データと半構造化インタビューという二つの方法を用いる。カップルの日常的な言語使用を録音してもらい、談話分析を行う (Wortham & Reyes, 2021)。インタビュー調査は参加者に言語ポートレートを作成してもらい、ポートレートを踏まえる自身の言語についての語りに顕在化する言語意識を解明することを目的とする。言語ポートレートとは現象論が基礎となるインタビュー形式を持つ創造的な研究方法である。インタビューでは参加者が「身体の画線に自身のことばを位置付けて描く」(岩崎, 2022:101) 作業をすることにより、参加者自身の言語資源について考察する。言語イデオロギーの研究でもよく使われ

¹ 「国際カップル」に鍵括弧をつけた理由は、「国際」という表現には国籍や市民との関連が強く、本質主義的な概念だからである。

る方法である (Busch, 2017)。身体とことばの結びつきで自身のことばや言語学習について語る中で、自身のことばに対しての思いや感情が現れると期待される。

4. 参加者の紹介

分析の結果を報告する前に、本研究に協力してくださったカップルを紹介する。Katharina はオーストリアのウィーンに隣接する町で生まれ、一年間東京の大学に交換留学し、現地で今の配偶者であるタカシに知り合った。自身の言語レパートリーには母語のオーストリアのドイツ語の変種、学校で学んだ英語、イタリア語と大学で専攻した日本語が含まれている。タカシはアメリカやカナダに留学し、東京変種の日本語と英語を駆使している。卒業後、大阪の会社に就職した。タカシと Katharina は 2021 年 11 月から 2 人で大阪で暮らしている。日常生活は英語と日本語を使っているが、それぞれの言語に対する意識が異なる。

5. メタ語用的談話に表面化する言語使用と言語意識

以下に Katharina の言語ポートレートとそれに基づくメタ語用的談話の分析を報告する。言語ポートレートにはドイツ語 (DEUTSCH)、オーストリアの家族と話すときに使うドイツ語の方言 (DIALEKT)、イタリア語 (ITALIENISCH)、英語 (ENGLISH) と日本語 (JAPANESE) がそれぞれ違う色で描かれている。日本語は Katharina が好きなピンク色で、身体を中心部に位置付けられている (図 1. を参照)。

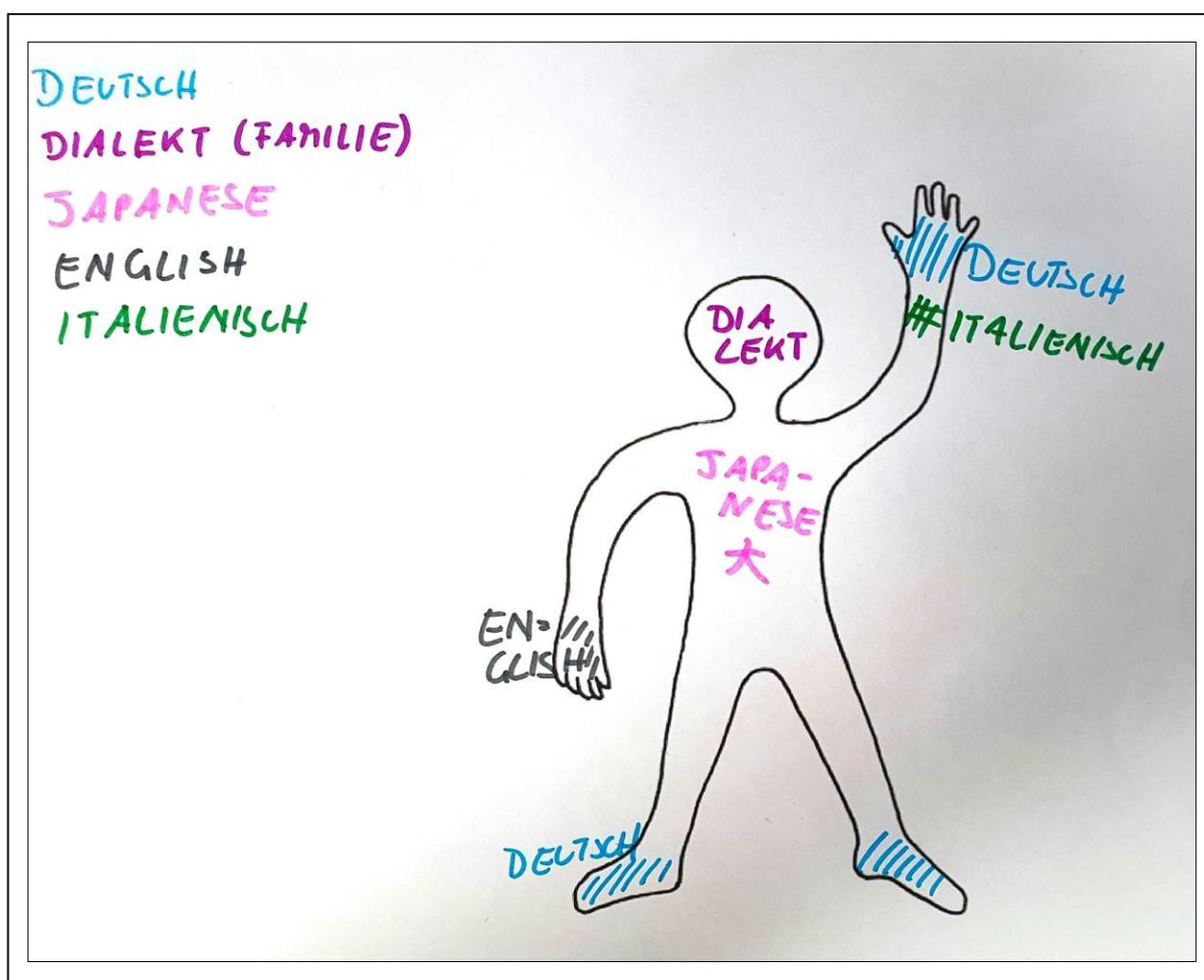


図 1. Katharina の言語ポートレート

インタビューでは Katharina は日常生活における日本語能力の重要性について次のように語る。

カシという代表的な「国際カップル」は日本に在住しながらも移動の経験を重ねてきて、その流れでことばを拾ってきた。本研究は（カップルの）アイデンティティ形成は、メタ語用的談話に表面化する言語使用と言語意識を分析すれば解明できることを指摘する。

参考文献

- Bucholtz, M., & Hall, K. (2004). Language and identity. In A. Duranti (Ed.), *A companion to linguistic anthropology* (pp. 369- 394). Wiley-Blackwell.
- Busch, B. (2017). Expanding the notion of the linguistic repertoire: On the concept of *Spracherleben*- The lived experience of language. *Applied Linguistics*, 38(3), 340-358.
- Damari, R. R. (2010). Intertextual stancetaking and the local negotiation of cultural identities by a binational couple. *Journal of Sociolinguistics*, 14(5), 609- 629.
- Gumperz, J. J. (1964). Linguistic and social interaction in two communities. *American Anthropologist* 66(6), 137- 153.
- 岩崎 典子 (2022). 「留学」研究からことばの学習と使用を考えるー移動を重ねるスロバキア出身Denisaの言語レパトリー 郁雄 川上・和子 三宅・典子 岩崎 (編) 移動とことば2 くるしお出版 pp.97- 126
- 河原 俊昭・浩子 岡戸 (編) (2009). 国際結婚多言語化する家族とアイデンティティ 明石書店.
- Piller, I. (2002). *Bilingual couples talk: The discursive construction of hybridity*. John Benjamins.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In J. A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics* (pp. 33- 58). Cambridge University Press.
- Spitzmüller, J., Busch, B., & Flubacher, M. - C. (2021). Language ideologies and social positioning: The restoration of a “much needed bridge” . *International Journal of the Sociology of Language*, 272, 1- 12.
- Takeuchi, J. D. (2020). Diversity, inclusivity, and the importance of L2 speaker legitimacy. *Japanese Language and Literature*, 54(2), 317- 325.
- Wortham, S., & Reyes, A. (2021). *Discourse analysis beyond the speech event* (2nd ed.). Routledge.